

押しかけ嫁はオレ様!!

ちよつと飲みすぎたかな……

通勤で使っているJR中央線で帰ってきた立原郁美は、少々ふらつく足取りで自宅マンションに向かつて歩いていった。

深夜に近いこの時間、駅前商店街を抜けて住宅街に入ると人影はほとんどなく、灯りが点いている家も数えるほどだ。

業界ではそこそこ名の通ったアパレル会社に営業として就職して五年。最近はこれこそ天職と思いはじめ、郁美はいつそう仕事に精を出している。

今日はまだ週の半ばながら、課全体の飲み会があった。

目標売上を達成し、気をよくした課長の柴山の「軽く行くぞ」というかけ声で酒宴へと持ち込まれたのだった。

郁美は肩にかかる髪をかき上げて、ふうと息をつく。それほど飲んだとは思っていない。体はふわふわしているが、意識はしっかりしている。

だから、送っていくという先輩の申し出を、「ひとりで帰れますから」と断ったのだが――

そのときのやり取りを思い出した郁美は、口元をにんまりさせた。

気にかげられて悪い気はしなかった。主任である四歳上の柚ノ木はイケメンで、女性社員の憧れの的だ。しかも課のエースで、担当している顧客も多く、今回の売り上げ達成も彼の功績が大きい。しかし断って正解だったろう。もし送ってもらっていたら、明日から他の女子社員の目が怖い。柚ノ木は独身で、つき合っている女性の話もなく、その爽やか系の甘いマスクから、「社内で一歩結婚したい男」と部署を問わず人気があるからだ。柚ノ木には可愛くない女と思われたかもしれないが、社内でもめぐとを起こすくらいならその方がマシだ。

同じ営業として柚ノ木を尊敬しているが、将来の結婚相手などという意識はまったくないので、誤解されても困る。そもそも、柚ノ木が自分みたいな色気のない女を選ぶわけもないし。

それに自分も営業として周囲にも認められてきたところなのだ。結婚と仕事、どっちを取るのかと問われれば、即決で仕事を選ぶ。

もちろん恋愛を否定しているわけではない。

一応女として夢は見ているし、これでも結構乙女だ。ただ今は柚ノ木に限らず、結婚について一ミリも考えられないだけ。恋人もいないなんて、と友人たちに揶揄されるけれど、ともかく今は仕事で面白くて堪らなかった。

「それをあの課長……つたく、ないない。絶対ありえない！」
この私に結婚しろなんて――

言われたときのむかつきを思い出し、郁美はつい拳を握った。

アパレル業界は昔から女性の多い職場だが、女の幸せは結婚だと唱える頭の固い男性社員がいなわけではない。まさに郁美の上司、柴山がそうだ。

『やっぱり女の子は結婚して家庭に入るべきだと思っただ。外で働くだけが仕事じゃないよ。嫁として妻として家庭で夫を支えるのも立派な仕事だ』

まったくどうしたらそういう発想が出てくるのだ。女性の社会進出に横やりを入れるようなこと言うな。

今日の飲み会で、唯一むかついたことだった。五十も過ぎて、人の生き方はそれぞれだということとが分からないのだろうか。

それに「女の子」だと？ 成人した女に「子」をつけて呼ぶなんて失礼な。せめて「女子」と言え。似たような言葉でも受ける印象は大きく違うのだ。どのみち、言われた時点でカチンとくるのだが、だがそう言われたとき、郁美は引きつりそうになる口元を、表情筋を駆使して笑みの形にした。

『私なんてまだまだ未熟者です。結婚なんて考えられませんが』

『そう言っているうちに、すぐに三十路になるぞ』

『まだ三年もありますよー』

だからどうした。そもそも三十という線引きは何だ。そう思いながら、さらに表情筋に頑張ってもらった。

年の離れた課長が、自分を娘のように心配して言ってくれているのは何となく理解している。だが結婚しろと言うのは大きなお世話。プライベートのことは放っておいて欲しい。

結婚を全面否定するわけではない。身の回りの世話をしてくれる人がいればもっと仕事ができるというのには同感だ。仕事で疲れて帰ってきた自分を優しい笑顔で迎えてくれ、部屋を片づけ、食事の用意をしてくれる。なんて魅力的な生活なんだろう。

郁美は独り暮らしをしているが、仕事にかこつけて家は散らかし放題、食事はほとんど外食かコンビニ弁当。早い話、家事が苦手なのだ。

家のことをやってくれる人を「嫁」と言うなら、嫁が欲しい。欲しい。猛烈に欲しい。

アルコールで少々思考回路がおかしくなっていた郁美の頭の中では、メイドではなく、嫁が家事労働の担い手として新たに定義された。嫁とは男がもらうものだという社会通念はすでに消え失せている。

にわかに願望が膨れ上がり、恥ずかしげもなく口に出す。

「欲しいぞ、欲しいぞ、おっよーめさん——っ」と

やっぱり、今日は飲みすぎたかもしれない。許容量内のつもりだったが、知らずオーバーしていたのだらう。

柴山に絡まれたことを除けば、今夜の飲み会は楽しかった。席を共にした他のメンバーも、郁美の仕事ぶりを認めてくれていたし、何より営業のエースにも頼りにしていると言われた。頑張りなわけにはいかない。

それを思い出して、郁美はさっそく明日の商談で売上を作るぞ、と今度は気合を込めて拳を握った。路地を曲がると、郁美が住む六階建てのマンションが見えてきた。部屋は2LK。一部屋は衣裳

部屋と称して物置化しているが、郁美にとっては落ち着ける城だ。たとえ物を出しっ放しで、床の見える面積がかなり少なくなっても。

マンションが近くなると、郁美はエントランスの傍の植え込みの横に人影を見つけた。

スーツ姿の男だ。街灯がスポットライトのように彼を照らしている。

同じマンションの住人だろうか？ といっても、郁美はほとんど家にいないので住人のすべてを把握しているわけではない。賃貸マンションなので、自治会もなく管理は不動産会社任せだ。

郁美は歩きながら、男を観察してみた。視力はいいのだ。

男の傍らには、軽く一週間ほど海外旅行に行けそうなスーツケースがあった。これから出かけるのだろうか。

男は、しきりに左の手首の辺りを気にしている。

手首を見てる？ もしかして時計かな？

郁美もふと時間が気になり、ポケットに突っ込んでいたスマートフォンで時刻を確認すると、間もなく終電が出るころだった。

そうしているうちに、二人の距離は近づいていき、男の顔がだんだん鮮明になってきた。

やばい。

郁美は、その容姿に惹きつけられてしまった。

見えているのは横顔だけだが、襟足で切り揃えられた髪、すつきり通った鼻梁は及第点、いや、及第どころか特大花マルかもしれない。ファッション誌に登場しそうな、そうそう拝めない極上メ

ンズだ。酔っていて判断力が鈍っていることを差し引いても、イイ男の部類に入るのは間違いない。そうやって観察を続けていた郁美は、あれ？ と思った。

あの人、知ってる——かも？

どこかで会ったっけ？ ひと目見たら忘れないうらいイイ男っぷりだけど、思い出せない。知り合いとか芸能人に似ているとか？

声かけてみようか、と郁美は思わず確かめたい衝動に駆られた。

いや、待て。今から自分は、男が背にしているマンションに帰るところではないか。

まるでナンパのように「前に会ったことありませんか？」などと言って誘っていると思われたら、面倒なことになりかねない。判断力は低下していても、理性はまだ稼働していた。

もしかしたら彼もマンションの住人かもしれない。だったら同じ住人として「こんばんは」と挨拶だけするのが妥当だろう。

かける言葉は、「こんばんは」。

自分にそう言い聞かせた郁美は、マンションに向かって歩みを速めた。

男とすれ違うまで、あと数メートル。

遠目でもイイ男と思つたが、顔立ちがよりはつきりと分かつてくると、ますますその容貌から目が離せなくなる。

つくづく自分は面食いだと苦笑いしてしまった。

そしてやはり、「誰かに似ている」と郁美は思った。テレビや雑誌などのメディアではなくて、もっ

と身近で。

会社の人？ 取引先の誰か？ それとも、学生時代の先輩とか？ ……どれも違う気がする。本当に誰だっけ？

郁美がぐるぐる巡る記憶と格闘していると、ふいに男がこちらに顔を向けた。とつさに後ろのマンションへと視線を移して、男を見ているわけではないというポーズを取るが、その動きはぎこちない。

まずい。彼に見ていることを気づかれてしまっただろうか。それでも気になって、意識がそちらにいつてしまう。

もう男と距離がなかった。郁美は俯いたまま近づき、「こんばんは」と声をかけて、急ぎ足でマンションのエントランスに向かう。

男は背が高かった。すれ違いざま横目でちらりと見たが、百八センチ近くありそうだ。街灯だけでは暗くてよく分からなかったけれど、着ているスーツもいい物のようだ。アパレル営業という職業柄、その辺には目がいつてしまう。

「おい」

男が発した声を背中に聞いて、郁美は立ち止まる。

えっと、「おい」って誰に言ったの？

他に人影はない。男が独り言を言ったのでなければ、自分に向けられた言葉だ。

郁美は、気がつかない振りをしてマンションに入ろうとしたが、思い直した。中に入ったとして

も、オートロックもないオープンなエントランスだ。男がその気になれば、エレベーターを待つている間に追いつかれてしまうだろう。それに、住人じゃないとしたら、もしかして道を訊きたいだけの人かもしれない。偉そうに「おい」と呼びかけられたのは気になるが、それはひとまず置いておくことにする。

道が分からないのなら教えようと思っただけで振り返った郁美に、男は予想だにしない言葉を吐いた。

「遅いぞ、いつまで待たせる気だ」

「……はい？ 私、ですか？」

待たせる気だ、と言われても、そもそもあなたと約束などしていませんが？

訝しむ郁美に構わず、男は話を続ける。

「他に誰がいる？ 帰ってくるのが遅い」

「いや、帰ってくるのが遅いと言われてもね？ 人違いじゃ……？」

郁美は胡乱げに、男を頭のとつぺんから靴先まで品定めするように見る。しかし何度見ても記憶に合致する男は浮かばず、首を傾げるばかりだ。

「お前が立原郁美じゃなければ人違いだな。だが、すぐに分かったぞ。まったく変わってないな。多少、トウが立ったが」

「……トウガタツタ、だと？ ちょっと待て」

自分の名を言った男に警戒心を抱くより先に、郁美はその一言に思い切り反応する。酔っぱらっているおかげで、その言葉は理性をすっ飛ばして感情回路に直結した。さっきまでイイ男だと思っ

ていたことは、きれいに頭から消えさっていた。

「失礼ね。あんた誰よ。帰ってきたところをいきなり呼び止めて」

すると男は眉根を寄せて、呆れた声を上げる。

「お前、俺が分からないのか？」

「はあ？」

まったく胡散臭い。郁美は男に負けず眉を寄せて見据える。

知っているのが当然だという口ぶりで言われて、素直に受け入れる人間がいるか。確かに以前会ったことがあるような気はしていたが、間近で見てもどこの誰だか思い出せないのだから、やはり知らないのだ。

「その顔だと、まだ分からないみたいだな。お前の記憶力はどうなってるんだ？ 頭の中も部屋と一緒に整理整頓できていないのか？ もっとも十六年ぶりだから、忘れてしまっても仕方ないか」
いちいち癩に障る言い方をする。だがその口調に何か引つかかるものを感じた。

それに、十六年ぶり——？

急いで記憶の検索をかけた郁美の脳内で、一人の少年がヒットする。これ以外思い当たる人物はいない。

「まさか、あんた……、彰伸……？」

「久しぶりだな、郁美」

呆気にとられた郁美の様子に、男——城之内彰伸は人を食ったような顔でにやりとした。

驚きのあまり酔いが覚める。それと同時に、郁美は一気に思い出した。

彰伸は、幼いころ、隣に住んでいた同い年の幼馴染みだ。親同士の間が近かったこともあり、家族ぐるみにつき合っていた。

二人とも負けず嫌いでよくケンカをした。たいてい彰伸に言い負かされるというパターンで決着がついていた。しかし、郁美が実力行使で彰伸を泣かせ、強引に勝ちをもぎ取ることもままあった。だからといって仲が悪かったというわけではない。何しろオムツをしていたころからのつき合いで、物心がついたころには一緒にいるのが当たり前になっていた。それこそ兄妹のように一つの布団で寝たこともあれば一緒に風呂にも入ったこともあるし、きれいな好きの彰伸に、親も呆れるほど散らかった郁美の部屋を片づけてもらいもした。

その節はお世話になりました。まだ分別のない子供のころの話です。

だが、小学五年生の終わりに彰伸は引越してしまっただ。

引越しの理由は、体調を崩した彰伸の母方の祖母の面倒を見るため一緒に暮らすことになったからだと言った。

『お前、俺がいなくてもやっていけるのか？』

別れの日、荷物を積んだトラックの陰で、これが最後と言いたげに彰伸が訊ねてきた。

『やっていけるよ。あんたなんかいなかったって平気だもん。もうすぐ六年生だからね』

『じゃあ、せいぜい頑張って片づけするんだな。俺がいなくても』

『何よ。私だって、やればできるんだから』

幼馴染みとはいえ、男の子に散らかった部屋を片づけてもらうのは、さすがにまずいなど感じていた矢先だった。ちょうど自分の体に変化し始め、女なのだと意識し出したころだ。

『部屋がどうしても片づかなかつたら来てやるよ』

『ふん、私はこれから自立した女になるんだから。あんたなんか必要ないの』

『ちえっ。はいはい、そーですか』

別れの寂しさを隠すため強がり口をすれば、彰伸はつまらなそうに横を向いた。

結局その後、十六年間再会することもなくそれっきりになってしまった。おかげで、家族のように過ごしたはずの幼馴染みのことは、薄情にも忘却の彼方かなたになっていたのだ。

「……彰伸、どうしてあんたがここに？」

驚いてばかりもいられない。郁美はもつともな疑問を口にした。

「お前に会いに来たに決まってるだろ」

「私に会いに？」

聞いた途端、郁美は不覚にも胸がどきりとした。目の前の男は誰が見てもイケメン。会いに来たと言われて嬉しくないわけがない。……嬉しくないわけがないのだが、これが城之内彰伸と分かった今は、正直微妙な気持ちになる。

「行くぞ」

「行く、ってどこに？」

唐突にマンションに向かって歩き出した彰伸に、郁美は慌てて訊ねた。

「お前の部屋。こんなところで立ち話なんて近所迷惑だろうが」

何を分かり切ったことを聞くのだと言わんばかりに、彰伸が答える。

「そうか、こんなところで話していたら、声が響いて近所迷惑。場所を変えるなら私の部屋が手取り早い——って？」

一瞬納得しかけた郁美だったが、いやそれは違うだろと思ひ直し、急いで彰伸のあとを追いかける。「まさかお前、せっかく訪ねてきた幼馴染みを邪険に追い返したりはしないよな？ もう終電も出てるし」

エレベーターの前で彰伸を捕まえるが、そう言われると郁美の胸はちくりと痛んだ。結局、仕方なく部屋に通してしまふ。

「部屋、相変わらず散らかってんなあ」

彰伸は部屋に入るなり声を上げた。

言われなくても、自分の部屋が人を招くのに相応しい状況ではないのは、重々承知していた。

玄関には、何人家族だというくらい靴が並んでいる。飲みかけのペットボトルや、昨日食べた弁当の容器はシンクに放置、イスには二日前に着たジャケットが無造作にかかっていた。ロングソファの足元には、写真を切り抜こうとしたファッション誌がページを広げたまま積まれている。

あれこれ見られる前に、郁美は二人がけのキッチンテーブルに彰伸をつかせた。その横に大きなスーツケースが並ぶ。

改めて明るい電気の下で見たが、彼が城之内彰伸なのは間違いない。成長とともに様変わり

してしまう人間もいるが、彰伸の風貌は郁美の記憶にある少年の面影を残しているし、彼の母親にもよく似ていた。

だからって、何でこうなるっ!!

「この荒れようじゃ部屋に呼ぶような男はいないな」

当然のように言い切られると面白くない。彰伸がどこか楽しげに見えるのも気に障る。

「やめてよ、男の話は。大きなお世話よ。私だって、人が来ると分かっていたら片づけぐらいたわだいたいずつと音沙汰なしだったのに、いきなり訪ねてきたのはあんたでしょ。それもこんな時間に」

「こんな時間になったのは、お前が帰ってくるのが遅かったからだぞ。ったく、いつもそんなのか？ どこをほつつき歩いていたかは知らんが、相当飲んだくれてるな。酒臭いぞ、お前」

男の話といい、飲んだくれ発言といい、自分を不機嫌にさせる物言いは相変わらずだ。郁美の感情ゲージが沸点近くまで一気に上昇する。

「今日は会社の飲み会だったの!!」

テーブルに身を乗り出し、遅くなったのはたまたまだったのだと、語気も荒く主張した。

そんな郁美を見て、にやにやと笑みを浮かべた彰伸は、挑発するように顔を近づけてくる。

「ちよつとからかうとすぐムキになって鼻を膨らませる。子供のころと変わってないな」

端正な顔が迫ってくる。その瞬間、郁美の胸はまだどきりとしてしまった。まずい。相手は彰伸だというのに面食いの性で、見惚れてしまふぞうだ。

郁美はゆつくり呼吸し、落ち着けと自分に言い聞かせて椅子に座り直した。

多分、近くまで来たから寄ってみたというわけではないだろう。その場合、留守だったら出直さ
だろ。こんな深夜まで待っているなんて、何かたまたまぬ事情があるとしたか考えられない。

「で、うちに来た本当の目的は何？ 私に会いに来たなんてよほどのことでも？ それともわざ
わざ昔のように片づけにでも来てくれたの？」

「そうくるか。なら話は早いな。単刀直入に言う。しばらくここに住むからな」

「しばらくここに住む……はあつ!? 何勝手なこと言ってるのよ!?」

何だ、その決定事項のような言いぐさは！ 単刀直入に切り出すのはいいが、話がるで見え
てこない。

あまりにも唐突すぎて声が裏返ってしまったではないか。

「いくら幼馴染みだからって、独り暮らししている女の部屋にいきなり来て、しばらくここに住む
て……まさかその年で家出じゃないでしょうね？ だったら私じゃなくて友達を頼りなさいよ」

「あほか、家出なわけないだろうが。ここから歩いて十五分のところに『喜多美』っていうレスト
ランがあるだろ。明日からその店長として働くんだよ」

『喜多美』は和洋食取り揃えたファミリーレストランだ。休みの日にモーニングを食べに行くこ
もあるのを知っていた。

彰伸がその店長？

目の前の男の外見から連想する職業はクールな商社営業マン。それもエリート。とてもじゃない
が、笑顔が必須の飲食業と結びつかない。

もしかして、店長は客席には出てこないで店の奥にいればいいものだろうか？ それならこ
の何かと偉そうな物言いをする幼馴染みでも務まるのかもしれないが。

「だったら、この辺で部屋を借りればいい話じゃないの」

「仕方がないだろ。二日前まで上海シヤンハイにいたんだからな」

「上海？ 海外じゃない。なんでまたそんなところに……」

「うちの会社と業務提携している上海の外食企業の企画開発部に、三年ほど出向していた」

「じゃあ久しぶりの日本なの？」

「まあな。おかげで学生ときの友人とも疎遠でな」

辞令が下りたはいいが引き継ぎに手間取り、日本での部屋を手配する余裕もなく、ぎりぎりで戻っ
てきてしまったと彰伸は語った。

そういう事情なら、住むところが用意できていないという話にも頷けるが、どうして自分のとこ
ろに来たのだろう。確かにそのファミレスに通うにはもってこいの場所に住んでいるが、それだけ
で十六年も会っていない幼馴染みの家に転がりこもうという発想が出るのは理解できない。いやそ
れよりも実家はどうした。

「実家には戻らないの？」

「周囲の人間がうるさいからイヤだ」

「イヤだって、何それ!？」

子供のような彰伸の返事に郁美はイラッとした。

「じゃあ、部屋が決まるまでホテル住まいすれば？」

「ホテル代もバカにならんし、第一この辺にそんなビジネスホテルあるか？」

「あ——ないかも」

彰伸の言うとおり、ここは住宅街なので、そんなものはないかもしれない。

だが電車に乗って繁華街に行けばいくらでもあるし、当座の住処すまかになるような短期賃貸マンションもあつたはず。

「電車でちよつと街に出れば済む話でしょ」

「お前、俺に電車通勤しろというのか？」

「それが普通でしょうが」

「俺は、電車通勤は嫌いだ。毎日あんなぎゅうぎゅうに混んだものに乗ってられるか」

「マジで言ってるの!？」

呆れて声が裏返った。いったい何様のつもりだ、こいつは。

「……上海では乗らなかつたの？」

今までどういう働き方をしていたのか気になり、郁美はつい聞いてしまった。

「仕事先の近くに部屋を借りていたからな。よほどのことがない限り、電車に乗ることはなかつた」

「ああ、そうですね。あんたの話を聞いてると、毎朝ラッシュで人にもまれて通勤している自分がバカに思えてくるわ。あ、じゃあ学生時代はどうだったのよ。通学は？」

「中高一貫の私立で、敷地内にある寮生活だったんだ。だから通学に交通機関を使うことはなかつ

たし、大学も近場に部屋を借りて歩いて通っていた」

「そ、そうなの」

電車嫌いは筋金入りのようだ。それが高じて、たまたま徒歩で通えるところに住んでいる自分のところに来た、ということか。

彰伸が体を捻ひねり、キツチン、バスとトイレに続く扉、引き戸で区切られた二つの部屋を順番に見た。

「そういうことでここに住む。見たところ、ちょうど二部屋あることだしな。家賃も入れてやるし、ルームシェアでもすると思えばいい」

「あのね！ 家賃とかルームシェアとかって、勝手に決めないでよ！ 何でそんなに偉そうなのよ、

あんたは。それが人にものを頼む態度なの!？」

何が、「そういうこと」だ。上から決定事項みたく言うんじゃない!

「お前と俺の仲だろ？ 昔はよく一つの布団で寝ていたじゃないか」

「何年前の話よ、それっ！ もう一緒に寝るような年じゃないでしょ!!」

だいたい幼馴染みとはいえ男と女なのだ。うっかり何か間違いが起きたらどうする。

……って、私と彰伸が間違いを起こす？

その様子を想像してしまい、背筋にむずがゆいものが走った。

ありえない。彰伸相手に何を考えているのだと、すぐさま全否定する。こんなことを一瞬でも考えてしまったなど、彰伸に悟られたくない。

郁美は動揺を気づかれないようにさらに言葉を重ねた。

「あ、あんただってこういうことを知られたら困る相手がいるんじゃないの？ 電車通勤が嫌だから女の家に転がり込むだなんて、彼女が泣くよ」

郁美とて、相手が女友達ならまだ考えなくもないのだ。しかし、それもよくて数日。どのみち、他人と長い期間住むのは自分には難しいだろう。気ままな独り暮らしを邪魔されたくない。気を遣うのは会社だけで十分だ。

彰伸がじつとこちらを見ていた。その表情に揺るぎはなく、むしろ余裕すら感じる。

「俺は今フリーだ。知られて困るような相手はいない。それにお前だってそうだろう？ 男なんかいないとさつき言ったよな」

また男の有無を持ち出した彰伸に、郁美の感情ゲージは今度こそ沸点を超えた。

「悪かったわね、男がいなくて！ 何度も言わなくてもいいじゃない、今は仕事のほうが面白くて仕方ないの！」

郁美は、鼻息も荒く声を張り上げる。

「ならお前も問題ないな」

「そういうことじゃないでしょっ！」

「世間体を気にしているのか？ だったらますます問題ない。お前は俺の嫁になればいい」

「はあ？ 嫁になればいい、だと？」

郁美は聞き間違いかと瞳目をした。

今、何と言いました？ 誰が誰の嫁になると？ どういう展開だ、それは！

「お前を嫁にもらってやるって言ったんだ。悪い話ではあるまい」

彰伸は澄まして言うが、郁美の頭はさらに激しく煮えたぎる。

「勝手なこと言ってるんじゃないわよっ!! バカにしてんのっ!!」

郁美の脳裏に、今日の飲み会で結婚を勧めてきた柴山の顔が浮かぶ。彰伸も、女は嫁になって夫に尽くせと考える男なのか。

何か胸のすくような切り返しをしなければ気が収まらない。

「そうね、あんたがどうしてもって頭を下げて、私の嫁になるってんなら考えてやってもいいわよ。私は嫁が欲しいの。家のことをやってくれる嫁がいたらもって仕事ができるでしょ？ 至れり尽くせり傳かいて衣食住の面倒を見てくれるっていうね」

お互い負けず嫌いなのは今に始まったことではないはずだ。彰伸もプライドはやたら高かったの
で、こんな条件を承知するわけがないと踏ふんでの切り返しだった。

彰伸は言葉が出ないのか、一瞬目を瞠みはって押し黙った。

予想通りの反応に、郁美は「勝った」と内心ほくそ笑む。子供のころ口では勝てたことになかった自分が、ようやく彰伸を言い負かしたのだ。

郁美は「ふふん」と笑みを浮かべて、得意げに彰伸の様子を窺うかがった。

彰伸は、唇を固く結んで郁美を見ていたものの、顔にはこれといった表情はなく、言うなればポーカーフェイス。変化といえば、テーブルに肘をつけて組んだ手に顎を載せたぐらいか。

しばらくして、彰伸がおもむろに口を開いた。

「それが条件か？ 俺が嫁になるなら、お前は一緒に住んでもいいんだな」

「え……、ちよつと彰伸？」

「嫁としてお前を衣食住丸ごと面倒見てやる。それでいいんだな」

「嫁になる？ 彰伸が、私の？ 言い負かそうとして墓穴を掘った？」

「冗談言ってるの、よね？」

「郁美はひくり、と目元が引き曇るのを感じた。」

「本気だが？ ここに住めるなら、嫁になるくらい安いものだ」

「安いもの、ですって？ あんた、電車嫌いにもほどがあるでしょっ!!」

「郁美は、バンツとテーブルを叩き、立ち上がった。その勢いで椅子が音を立てて後ろに倒れる。」

「そんなに電車で通勤するのが嫌なのか、こいつは！ 自分の嫁になるというのは電車通勤よりも軽いことなのか。」

「何かもつと言わなければと思ったが続く言葉は見つからず、郁美は代わりにわなわなと震える唇を噛んだ。ぶちぶちと思考回路が断線していき、頭の中が真っ白になる。」

「これ以上まともに考えられない。それは酒のせいなのか、怒りのせいなのか。目まいがして視界がぐるぐる回り始める。もうダメだ。」

「体がぐらりと傾ぐのを感じた郁美は、そのままベタリと床に座り込んだ。」

「郁美っ!？」

「自分を呼ぶ彰伸の声が遠くで聞こえた気がした。」

「白い霧の中に浮かぶのは、幼稚園児くらいの男の子と女の子の姿。二人はおもちゃの茶碗と皿を持ってている。郁美は遠くからぼんやりとその光景を眺めていた。」

『はい、お母さん、ご飯をどうぞ』

『もぐもぐ。お父さんが作るご飯おいしいね』

「おままごと？ でもそのセリフおかしいでしょ、役割が男女逆転してない？ と突っ込む気力はなかった。きやいきやいと楽しそうに笑っている声をただ聞きながら、郁美の意識はフェードアウトしていった。」

—— いい匂いがする。

「郁美は布団にくるまりながら、寝返りを打つ。」

「そろそろ起きるか。シャワー浴びたいし。今日は取引先に直行するから、いつもより遅く出てもいいんだけど。」

「それにしても変な夢を見たと思いつつ、郁美はベッドで上体を起こして伸びをする。」

「突然幼馴染みの男が深夜訪ねてきて、自分と一緒に住むと言う。それも嫁として。」

「プロポーズのように思えなくもないが、そんな夢を見てしまうほど結婚したかったのだろうか。」

「嫁として」のくだりが実に自分の願望どおりで、思わず苦笑いしてしまう。まあ現実には、男が嫁になるだなんてバカげた話があるはずがないのだが。」

「あれ？ 服着たまま？」

自分が昨日の服のままであることに気づく。着替えもしないで寝てしまうほど、酔っていたのだろうか？

郁美はまだはつきりしない頭で昨夜のことを思い出してみた。

飲み会から帰ってきたらマンションの前に男がいたとか、それが幼馴染みの城之内彰伸だったとか、その彰伸がここに住むと言い出したとか、私を嫁にもらってやるとか、そっちが嫁になるなら考えてやってもいいとか言い返して？

どこまでが本当で、どこからが夢なのだろう。

まだ寝惚ねぼけているのかもしれないと、郁美は頭を振った。だが次の瞬間、完全に覚醒する。

「おい、いい加減起きたらどうだ」

「えっ」

男？ 今の声、男？ ドアの向こうに男がいるの？ いったい誰？

まさか昨日、自分は酔っぱらってどこかの男をお持ち帰りしたのか？ そして一夜を過ごしたと？ ウソだ、信じられない。自分がそんなことをしでかすなんて。だが現実には男の声がしたではないか。

郁美は、ぐくりと唾を呑んだ。寝起きで口の中が気持ち悪かったが、そんなことは言ってもらえない。さーっと血の気が引いていき、手足が冷たくなってきた。得体の知れない男への恐怖心が湧き上がる。

「うっぎゃああ〜っ!!」

気がつけば、自分でも驚くほどの悲鳴を上げていた。

「どうした!？」

驚いたのはドアの向こうの男も同じらしい。慌てたように、激しくドアが叩かれる。

「入るぞ」

「いやああ！ ま、待ってー!」

そうだ、叫んでいる場合ではなかった。郁美は再度自分の格好を確かめた。

昨日着ていたシャツブラウスにスカート。ウエストのホックは緩めてあったが、ストッキングは着けたままで。つまり、あれをした形跡はない。——と思う。

郁美は、ひとまずほっとしたもの、ある事実には思い至った。

夢じゃなかったの!? 今、ドアの向こうにいる男は、城之内彰伸!?

「どうした、郁美。大丈夫なのか？ ドア開けるぞ」

「ま、待ってって！ 今そっち行くから!」

何でこんなことになっているのか。夢ならさっさと覚めて欲しい。

「朝っぱらから何て声上げてるんだ。近所迷惑だろうが」

「ひっ!」

寝室からそろりと顔を出した郁美に、ドアの向こうにいた彰伸は冷めた目を寄こした。まだどこか信じられない思いでいた郁美は、目にした男の姿にこれが現実かと息を呑む。

「お前、人の顔見て何て態度だ。失礼だな」

「い、いやあ、ごめんごめん」

郁美は誤魔化すように笑って、彰伸を改めて見る。

白いワイシャツにダークグレイのスラックス姿だが、ずいぶんラフな着方をしている。シャツの裾は出したまま、胸元は第三ボタンまで開け、袖をまくっていた。何かひと仕事したあとみたいだ。それでも見た目はイケメンなので格好いい。朝日が差し込む部屋の中で見ると、なおのことその端正な顔立ちが際立っている。

子供のころ何度も泣かせた彰伸が、こんなに格好よく成長しているなんて詐欺だ。

「郁美、俺の顔に何か——」

「あ、この匂い。味噌汁だよね」

まずい、見すぎた。自分でも唐突だとは思ったが、彰伸の言葉を遮るべく先ほどから気になっていた匂いについて口にした。そうだ、今朝はこの匂いで目が覚めたようなものだ。

郁美は、ちらりとキッチンに視線を走らせた。流しに溜めてあった洗い物がない。ガステーブルの上には片手鍋が一つ載っているだけで、他の調理器具は見当たらなかった。それどころかキッチンだけでなく、部屋全体がきれいさっぱりすっきりとしていた。

「……もしかして、あんたが片づけたの？」

「他に誰がいるっていうんだ？」

片づけ魔はいまだ健在らしい。彰伸がそばにいた昔を思い出す。部屋を片づけてもらおうと決まっていた、ゴミ袋がいくつもできた。

まさか今回も、と周囲を見れば、玄関の近くに大きく膨らんだゴミ袋の山。

「何、そのゴミー！」

郁美は彰伸に向き直って叫んだ。一個、二個なら分かるが、五個か？ 五個もあるのか？ いったい何を入れた!?

「食器を洗ったあとに、その辺にあったゴミにしかならないものをまとめただけだ。だいたい、どれだけ溜め込めば気が済むんだ、お前は。賞味期限切れの食材も全部放り込んだぞ」

「でも勝手に——」

すると、彰伸に、ぎろりと睨まれる。

「話してる途中で潰れたのはそつちだろうが。お前をベッドに片づけたあと、勝手にさせてもらった」

「そ、そんな……って、あんたが私をベッドに!？」

正直に言えばそのあたりの記憶は曖昧だ。「ベッドに片づけた」と物扱いされたのは不本意だが、運んでくれたことには一応感謝しておこう。

「とりあえず、先にシャワー浴びてアルコールを抜いてこい。まだ酒臭いぞ」

「ぐっ、酒臭い……って」

カチンときたが、上手い切り返しが出てこない。ひとまずここは従うことにする。

「そ、そうね、ちょうどシャワーしに行こうと思ってたのよね」

言われたから行くのではないという体裁を取って、郁美は彰伸に背を向けた。目が覚めたときからシャワーは浴びたいと思っていたんだし、嘘ではない。

「まったく、お前は素直じゃないな。可愛げがない」
背中から、彰伸のむかつく追いかける。

「可愛げなくて悪うございましたね」

言われっ放しはやはり腹立たしく、引き返した郁美は彼につかみかろうとした。しかし、軽くかわされて腕を取られる。

「いちいち突つかかるな。昨日も思ったが、本当に子供のときから変わってないな。怒ると鼻が膨らむところも、手が出るころも」

「あんただって変わってないじゃない。偉そうだし、本当に何様のつもり？」

どこか楽しげな彰伸に対して、郁美はむっと口を尖らせた。

外見こそ見惚れてしまうほど格好よく成長していたが、中身は間違いなくあのころのまま。むしろ偉そうな態度に磨きがかかっている。

「いいから、さっさとシャワーを済ませてこい。食べる時間がなくなるぞ」

「食べる時間？」

聞いた途端、郁美のお腹は空腹を訴えるみことな音を上げたのだった。

身に着けていたものを洗濯機に放り込んで、浴室に入った郁美は、普段はかけない内カギに手を伸ばす。今さら警戒心を働かせても遅いのだが、ドアの向こうに人がいるというのは落ち着かないものだ。

そしてシャワーを出して頭から存分に湯を浴びる。浴槽に湯を張りゆっくり浸かりたいところだったが、それほどんびりしている時間はない。

体から髪まで、洗えるところはすべて洗った。仕上げに、タオルで拭いた体にボディローションをつける。ほんのりフローラル。これで酒の臭いは完全に消えるだろう。

「あ、しまった」

浴室を出た郁美は、着替えを持ち込まなかったことに気づいた。これも彰伸に急かされたからだと、ぎりりと歯噛みする。

しかし、ないものはない。まさか彰伸に着替えを持ってきてもらうわけにもいかない。さっきまで着ていた服をまた着るといふ手も考えたが、せっかく体を洗ったのに煙草やら何やらの臭いが残るものを着るのは抵抗があった。

仕方なくバスタオルを体に巻きつけると、ドアから少し顔を出して、彰伸に向かって声をかけた。「ちょっと、出るからこつち見ないでよっ」

キッチンのテーブルで新聞を読んでいた彰伸は顔を顰めたものの、やれやれといった風情で椅子ごと体の向きを変えて、郁美に背中を見せた。

郁美は、急いでキッチンを横切り、寝室に飛び込む。普段なら裸で堂々と部屋の中を歩き回っているのに。

「まったく、何で私がこんな目に」

ひとりごちながら、下着をつけ、仕事に着ていく服を選ぶ。

アパレルという業種がら、服装に規定はなく個人のセンスに任されている。だがTPOは当然意識しなくてはならない。今日は商談が入っているからと、郁美は落ち着いた色合いのシフォンブラウスに同系色のプリーツスカートを合わせて、少々おとなしめのエレガンス系にまとめた。

髪を乾かし、メイクは下地にファンデーションだけにしておく。仕上げは食事を終えてからだ。郁美は身だしなみを整えると、再び寝室から出た。

「さっぱりしたようだな」

「……うん」

彰伸も通勤服に着替えたようで、先ほどとは違い皺のないワイシャツに、きっちりネクタイを締めていた。馬子にも衣装、と言ってやりたいが、あいにく奴はイケメンだった。

郁美は彰伸をじっと見つめていたことに気づき、慌てて視線を逸らした。返事をするまで妙な間が空いてしまったが、変に思われまいだろうか。

「どうした？ さつさと座れ」

偉そうな口調なのは気に食わないが、ここで言い争っても意味はないので、郁美は素直に従った。テーブルの上には、いつもは一人分しか並ばない食器が二人分ある。

彰伸は郁美が席に着いたのを確かめると、汁椀に味噌汁をよそって運んできた。続けて炊飯器の蓋を開け、ご飯をよそい始める。どれも用意されるのは二人分。

何よ、これ——

郁美は心のうちで呟く。

うっかり新婚家庭のようだと思うほど、ほのぼのとした朝の光景だった。

新婚だど？ いやいや、自分が勘違いしてどうすると、郁美は自分自身に言い聞かせる。

嫁云々は言葉のあやだ。同居の条件として衣食住を受け持つ——紛らわしいが、そういう意味で言った言葉だ。

昨夜の会話は今一つ噛み合っていない気もしたが、彰伸にしても「俺の嫁になればいい」と言ったのは、同居に持ち込むためだろう。十六年ぶりにいきなり押しかけてきて、プロポーズなどあるはずがないのだから。

「何を小難しい顔をしている。ほら、メシ」

「ほっとけ。……うわ、米粒が立ってる」

彰伸からご飯茶碗を受け取った瞬間、郁美は心中の戸惑いをひとまず横に置いた。炊き立てのご飯はあまりにも魅力的だ。さっそく味わいたいと——つまり食欲が勝ったのだ。

炊き上がったばかりのご飯は本当に美味しい。レンジで温め直したものは違う。味噌汁の具はワカメだけだったが、これもなかなかのものだ。

「美味しい。でも味噌とか米なんてうちにあったっけ？」

郁美は、自分の家のことながら買い置きがあったかどうか覚えていなかった。

「全部冷蔵庫にあったものだ。乾燥ワカメも入ってた」

汁椀を手にした彰伸が、郁美にちらりと目を向けてこともなげに言う。

そうか、全部うちにあったものなんだ。限られた食材でこんなに立派な朝食が作れてしまうなん

て、彰伸の腕は大したものだ。それともこれくらい誰でもできることなのだろうか。

「気に入ったか、嫁が作った朝食」

「嫁って……。そ、その嫁のことだけど、あんた本気で言ってるの!？」

「むろんだ」

箸を握りしめながら訊ねた郁美に向かって、彰伸は何を今さらという顔をした。

本気か。だが間違えてはいけない。彼が言う「嫁」とは本当に結婚するという意味ではないのだ。郁美は自分に言い聞かせつつ、彰伸の説得にかかった。

「でもさ、やっぱりまずいと思うのよ」

「だが、昨日『嫁になるなら同居していい』と言ったのはお前のほうだ」

「それは! ……そうだけど」

ああもう。すべて酔っぱらって言った戯言だということにしてしまいたい。だから、無効ということにしたい。だいたい、こんな適当な話を真に受けるほうがおかしいではないか。

「俺が嫁になるのがそんなに嫌なのか?」

「嫌というか、何というか――」

「お前、朝起きてこの部屋を見たとき、どう思った?」

「きれいになってるな、と」

「嫁としての腕前は認めるな」

改めて見渡さなくても部屋の変貌は、もう承知していた。ビフォーアフター。部屋の中で散らかっ

ていたものは、それがたとえゴミ袋の中でも、あるべき場所に収まっている。

まさに一家に一台、城之内彰伸。片づけ上手に加え、料理も美味い。

だからといってこの申し入れを認めるわけにはいかない。

「で、でもさ。彰伸が家事が上手いのは分かったけど、一緒に住むっていうのは……。そりや家のことやってくれる嫁の話は魅力的だけど、それとこれとは別っていうか」

いくら願ってもない話でも、気にするなと言うほうが無理だ。だが、郁美が一番気にしているのは――

「やっぱりさ、そのさ」

しかし、どう言ったらいいのだろう。間違いが起きたらという心配を口にするのは、恥ずかしかった。見たところ、彰伸にはそういうことを気にしている様子がまったくなくない。こんなことを考えてしまう自分は、自意識過剰なのだろうか。

言葉を濁しながら話す郁美の懸念が伝わったらしく、彰伸が意地悪そうに目を細めた。

「ふーん、つまりお前は、俺とどうにかなることを期待しているのか? まあ嫁の義務として、夜の生活のことも込みにしてもいいがな」

「き、期待なんかしてないっ!! 夜の生活って、朝から何てこと言うのよ!!」

「先に話を振ったのはそっちだろう。お前もその辺は女ってことか」

「だって普通考えない? 男女で同居ってことばさ」

ちゃんと気持ちがあつた上でことに及ぶのはやぶさかではないが、いくら見目がよくてもこの幼

馴染みを異性として考えることはできない。

「いらん心配だ」

やや呆れを滲ませつつ、彰伸はきっぱりそう言った。

「……いらん心配なの？」

その言葉の意味するところは何？ 自分に女としての魅力が皆無なのか、それとも彰伸が実は別方向に目覚めていたとか？

郁美はもやもやした気持ちのまま、おずおずと上目遣いで彰伸を窺った。対して彰伸は、まだ何か心配なのかと、至極真面目な顔をして口を開く。

「ああ。その気があるなら、昨日のうちに押し倒している。だが俺には理性がある。ガキのころとほとんど変わっていないお前をどうこうするほど俺は飢えちゃ——」

郁美の目元がひくり、と瘰癧した。今何と言われた？ つまり前者、私に魅力がないということか？

彰伸の言葉を遮り、郁美は食ってかかる。

「ガキのころと変わっていないって、子供体型で胸がないってこと!? そういや昨日もさんざん言ってたよね？ 変わってないって。それも笑いながら！」

「そんなこと言っていないだろ。胸の大きさなんてどうだっていいじゃないか」

「よくないっ。掌に収まる片手サイズなのを、気にしてるんだから！」

上げて寄せないと谷間ができないことは、昔からのコンプレックスなのだ。

「片手サイズって、お前なあ」

「何っ!？」

「ああ、もう分かった分かった。鼻を膨らませるな。悪かったな」

郁美の剣幕に折れた彰伸は、面倒臭そうではあったが謝罪してきた。そしてテーブルの端に置いていた腕時計を取り、左手首に嵌める。

「時間だ。お前は何時に出かけるのか知らんが、俺はもう出る。食器は帰ってきてから洗うから」

彰伸はいつの間にか食べ終えていたのか、使った食器を流しに持っていくと、部屋の隅のスーツケースにかけていた上着を取る。

「出るって、仕事に行くってこと？」

さっきまで言い争っていたのに、急に仕事モードか。

その切り替えの早さに呆気に取られつつ、郁美は玄関へと向かう彰伸を目で追う。

「ああ。続きは帰ってからな」

上着を羽織って玄関に立つ彰伸は、やはり格好いいエリートサラリーマンに見える。

「七時には帰れる。お前もさっさと帰ってこいよ。嫁が食事の準備してやるから」

「待ってよ、彰伸」

郁美は立ち上がって、靴を履いている彰伸の背中に向かって声をかける。

「何だ、嫁に行つてらっしゃいのキスでもしたいのか？」

「するかっ、バカ!!」

「だろいな」

くすつと笑った彰伸は、これまた高そうなブリーフケースを手にして出て行った。

玄関のドアがぱたんと無機質な音を上げて閉まる。

「行っちゃった……」

ドアをぼんやり見つめながら郁美は、目覚めてから怒涛の展開だ。いや再会した昨夜からか。

すでに一週間フルに働いたような疲れを感じて、このままベッドに入ってひと寝入りしたい衝動に駆られた。しかしそんなことをすれば確実に商談に穴を空けることになる。

「とにかく、私も行かなくちゃ」

メイクを仕上げるため寝室に向かおうとした郁美は、ふと部屋を見回す。

改めて見ても自分の部屋とは思えない。それほど昨日までとはがらりと様相を異にしていた。

無造作にそこら辺に置いていたものがなくなっただけで床の見える面積は広がり、テーブルの上も今は自分が使った食器が出ているだけ。玄関脇に積んだゴミ袋がなくなれば、もつとすつきりするだろう。

結構広かったんだ。だったら共同生活もできるかも……

そう考えそうになって、郁美は慌てて首を横に振った。

「何考えてるの、私」

部屋が広いというだけで、一緒に生活できるわけがない。だいたい、嫁になるだなんて本気で言っ

ているのかあの男は。

女性に興味を持ってないあまり、何かに目覚めてしまったとは思いたくない。だがその可能性を含めても、どういう思考回路をしているのか理解できない。よくもあんなに簡単に、ままごとの役決めのように「嫁になってやる」などと言えたものだ。

そういえば、と郁美は彰伸の両親が洋食屋を営んでいたことを思い出す。彰伸の父が作ってくれたオムライスは美味しかった。今も元氣にお店をやっているんだろうか。

引越した後、子供同士は疎遠になったが、母親同士は今もまめに連絡を取り合っているらしい。五年前、自分の母親を通じて彰伸の母から就職祝いをもたらした。母親に社会人としてのマナーだからと言われて、すぐに礼状を出したが、それっきりになっている。

寝室から、かすかに軽快な曲が聞こえてきた。スマートフォンに今日のスケジュールを登録したときにセットしておいた出勤時間の合図だ。

「おっと、本気で急がなくちゃ」

ひとまず考えるのも、思い出に浸るのも後回しにしよう。

郁美は、仕事に持つていくバッグの中身を確認して、身仕度に取りかかった。

デパートやファッションビルが建ち並ぶ市街の中心地から、少し外れた繊維問屋街。その歴史は古く、数百年も前から時代の変遷とともに今日まで続いている。

郁美の勤めるアパレル会社もその街の一角にあった。

取引先との商談を済ませて昼前に出社した郁美は、部署内で共有しているデスクトップパソコンの一つを使って、注文を受けた商品の番号を入力していた。今月の売り上げを達成したからといって、気は抜けない。すぐに来月分のノルマを立てて、それに向かって今から準備しなければならない。「よし、できた。来週には入ってくる商材だし、納期は二週間後。——ふふん」

どうだ、とエンターキーを叩きつけ、郁美は得意げな顔をする。

実は、商談中もあの失礼極まりない幼馴染みの顔が頭にチラついていた。あんな押しかけ男ばかり気を取られてたまるかと、いつにもましてセールストークに力が入ったおかげで商談も無事まとまったのだ。

「立原さん、さっそく売り上げ入力？」

「柚ノ木主任」

急に後ろから声をかけられ、郁美は顔を上げて振り返った。

柚ノ木は隣の席の椅子を引き寄せて座り、郁美が使っている端末のモニターを覗き込む。

「へー、すごいじゃないか」

「今朝の商談、上手くいったんです」

画面に出ているのは今入力したばかりの売り上げだ。柚ノ木に比べたらそれほど大きな数字ではないが、同期の営業の中ではそこそこのと自負している。

「この調子で他の取引先とも話を進めていけば、次も数字取れそうだね。あ、そろそろ新商品の話もしておくといいよ。サンプルも上がってきているから」

「分かりました」

郁美は柚ノ木の言葉を忘れないよう、パソコンの脇に置いていた手帳にメモを取る。

いつもさらりとアドバイスしてくれる柚ノ木は、決して押しつけがましくなく、嫌味も言わない。それに課長の柴山のように女性社員を「女の子」扱いしない。こういう人が上司だったらいいのに、いつも思っている。

「昨日ちゃんと帰れた？」

画面を覗き込んだまま、柚ノ木が声を潜める。会社の飲み会の話とはいえ、私語を気にしてのようだ。

「やっぱり送ってあげばよかったって心配してたんだ。結構飲んでたでしょ」

「すみません。売上を達成できたのが嬉しくて、つい調子に乗っちゃって」

答える郁美も、柚ノ木につられて声を小さくした。飲みすぎたのは柴山にむかっていたことだったが、それはあえて言わない。

そんな郁美に、柚ノ木は微かに口元を綻ばせた。「次は送らせてね」と耳打ちして、椅子を滑らせて離れる。

「主任……？」

意味を把握するのに少し時間がかかった。そして言わんとすることを理解した途端、郁美の胸に一瞬淡い戸惑いが生まれる。

自分に気があるなどと勘違いするほど自惚れてはいないし、柚ノ木は誰にでも優しいので、「後

輩を心配する先輩として」以上の意味はないだろう。だが、悪い気はしない。

郁美がちらりと隣に視線を移したときには、もう柚ノ木は何でもなかったように入力を始めていた。

彰伸もこれくらい優しい方がいいのに。偉そうな物言いで小バカにするのではなくて。ちょっとした気遣いや、言葉のチョイスで印象は変わる。

そうしたら自分も言い返すこともなく、少しは素直な態度で話せるかもしれない、と郁美は思った。

「そろそろ昼休みね」

郁美はポケットに入れたスマートフォンをそと取り出し、ディスプレイの時計を確認する。休憩に入ったら、実家の母に電話をかけるつもりだった。もちろん、彰伸のことを聞くためだ。

あまりに突然すぎてまともに考えられなかったが、一晚経って落ち着いてみると、分からないことがいくつかあった。

まずは、実家を出て独り暮らしをしている自分の住所を、どうして彰伸が知っていたのか。共通の友人を介して彰伸が知ったというのは考えにくかった。何しろ十六年も経っているし、彰伸自身友人とは疎遠になっていると言っていた。

だから、疑わしいのはつき合ひのある互いの母親だ。自分の母親が彰伸の母親に住所を教えている可能性は高い。

社内に昼休みを告げるチャイムが鳴り響いた。

スマートフォンを手にした郁美は、同僚たちが昼食を取りに出ていくのを眺めつつ、母親の携帯に電話をかける。数回のコールのあと、電話が繋がった。

『郁美？ 珍しいわね、電話かけてくるなんて』

数カ月ぶりに聞く母親の声だったが、挨拶もそこそこにさっそく用件を切り出した。

「聞きたいことがあるの。城之内彰伸、もちろん覚えてるよね」

『あら、あなたからその名前が出るなんてね。何？ 会ったの？』

その言い方でピンときた。やはり郁美の家を教えたのは母親か。

「会ったわよ、昨日。いきなり訪ねてきたから驚いた」

嘘は言っていない。嫁云々まで話す必要はないと思い、簡潔にまとめただけだ。

『そうなの。さっそく会いに行ったのね。こないだアキ君から、今度仕事先が変わるっていうメールをもらって、場所を聞いたら郁美のマンションの近くじゃない。だから、時間があるとき行ってみればって返事したのよね』

「何？ アキ君からのメール？」

アキ君とは、彰伸のことだろう。

『そうよ。メル友なの、アキ君と。最近はずぶやきもフォローし合ってるのよ』

母よ、娘の知らないところで何をやっている。母同士が仲がいいからって、どうしてその息子とメル友になるんだ。しかも、つぶやきをフォローとか、そんなことまでやっているとは驚きた。

『ねえ、アキ君どんなだった？ 男前になった？』

興味津々の声で母親が聞いてくる。メールのやり取りはあつても直接会つてはいないらしい。それもそのはずか、彰伸は最近まで上海にいたと昨日言っていたし。

「別に、普通でしょ」

本当は見惚れてしまうほどだったが、大したことないように郁美は答えた。顔がよくても、あの上からものを言う性格は断じていただけじゃない。評価を下げるべきところだが、一応モデル張りの外見を考慮してプラスマイナスゼロ、イコール普通とした。

『あらそうなの？ 今度あなたのマンション行くついでに、アキ君の仕事先見てこようかしら。でもアキ君の会社ってあんどこにあつたかしら』

「会社っていつでもサラリーマンじゃなくて、『喜多美』っていうファミレスの店長だよ」

『店長？ アキ君ずつと企画開発部だったのに、また何で？』

「本社に戻るんじゃないの？ と、母親が不思議そうに聞いてくるが、郁美が知るはずもない。『さあ？ 店長だつて言つたし、本人に聞いてみたら？ メル友なんでしょ』」

本社の企画開発部か……。そういえば、業務提携している上海の外食企業の企画開発部に出向していたと言っていた。他に何を言っていたわけ？ あまり覚えていない。とにかく、再会したときは近況を教え合う前に、とんでもない問題が発生していたのだから。

『店長なら、丈の長いエプロンとかつけてトレイとか持って、応対してくれるのかしら。おかえりなさいませ、お嬢様とか？』

「おかえりなさいませって……。あのね、お母さん。あの店はそんな雰囲気のお店じゃないって」

母よ、何かいろいろ混ざっているから。トレイを持って接客することもあるかもしれないが、『喜多美』はごく当たり前のファミリレストランのほずだ。カフェでも流行りの何とか喫茶でもない。……と、そんなことを話している場合ではない。本題に入らねば。

「そういうばお母さん。彰伸にうちの住所教えたの、お母さんなの？」

『えー、あなたの住所なんて教えてないわよ。そりゃ、独り暮らしをしていることは侑子さんに話したけど』

「おばさんにも教えてない？」

侑子さんとは彰伸の母親の名だ。話しぶりから、彰伸の母にも住所までは言っていないようだった。自分の読みは外れた。それならどうやって彰伸は知つたのだろう。

『それよりも、あなた。ちゃんと生活できてるの？ ちゃんと食べてる？ 部屋片づけてる？』

風向きがいつもの方向になり、これまでの経験上まずいと思つた郁美は、話を終わらせるべく言葉を紡ぐ。

「だ、大丈夫よ。ちゃんと食べてるし。あ、また電話するから。今からお昼なんだ」

これではあからさまに繰り返しが始まつたから切るといふ感じなので、「帰つたときに親孝行はたんまりするからね」とつけ加えた。

『もう、いつもあなたはそう言つて。仕事もほどほどにしなさいよ。あ、それから郁美——』

「はいはい。分かつてゐる。じゃあごめん、切るね」

母親のほうはまだ何か言いたかつたようだが、郁美は最後まで聞かずに通話ボタンをオフにした。

まったく、母親と話すといつもこうだ。決まって生活態度のことを言われる。娘を心配してくれるのはありがたいけれど、毎度毎度では少々煩わしくなってしまう。

「さ、ご飯食べてこよ」

午後は納品の段取りも済ませておきたい。

郁美はこれからのスケジュールを組み立てる。柚ノ木主任が言った新商品サンプルの手配もして、次の商談で話ができるようにしよう。順調にいけば、今日は七時には帰宅できるはず。

そして帰ったら、彰伸ときっちり話をするのだ。嫁登言にはちよっぴりそそられてしまうけれど、断固拒否。そもそも、酔っ払いの話を真に受けるんじゃないと説教したい。

今の自分が誰かと住むなんて、そんなの考えられません。

もう、自分たちは子供ではないのだ。

郁美は脳裏に浮かんだ幼馴染みの少年に向かって呟いた。

「遅い。七時だって言っただろ。もつと早く帰ってこないか」

八時近い時間に家に着くと、ドアの前で待っていた男——彰伸が開口一番、文句を垂れてきた。

「しょ、しょうがないじゃない。仕事が長引いちゃったんだから」

本当は、定時の六時で終わるはずだった。なのに会社を出たのが彰伸が言った七時。昨日に続き外で待たされることになった彰伸は面白くないだろうが、自分にも都合というものがある。

「早く開ける」

「今開けるわよ」

駅から走ってきた郁美は、肩で息をしたままバッグからカギを取り出し、ドアを開ける。

「あんたが待つてるって思って、急いできたんだからね。ちよつと聞いている？」

「聞いている。だが冷蔵庫が先だ」

ドアが開くと同時に、家主の郁美よりも先に彰伸が中に入った。

見れば彰伸は、近所のスーパーで扱っているエコバッグを手にしている。かなり大量に買い物をしてきたらしく袋はパンパンに膨らんでいた。

「はいはい、そうですか」

キッチンに向かう彰伸に続いて中に入りながら、郁美は口を尖らせた。

何だかって自分が怒られなければならないのだ。走って帰ってきたのは見れば分かるだろう。労いの一言があってもいいではないか。

それもこれも、柴山のせいだ。いつものことだが、柴山は何かと郁美に用事を言いつける。資料はどれだ、サンプルはどこだと聞かれるたびに、郁美は自分の仕事を中断せざるを得なかった。

しかも今日などは、大口の取引先が打ち合わせにやって来たのだが、その担当である柴山に「うちの課の女の子」と紹介され、商談に同席するように言われたのだ。

ファッション傾向や市場流通の話ならともかく、ゴルフに行ったあの、スコアがどうのという内容では話に入りづらい。そういった業務に関係ない話こそが彼らにとって大事なコミュニケーションなのかもしれないが、「女の子」は始終愛相笑いを浮かべているしかなかった。

おかげで、本来の自分の仕事を時間内に終わらせることができなかつた。彰伸を待たせてしまうとは思つたが、今日中に済ませておかなければ明日の業務に差し障るから仕方なかつたのだ。

「遅くなるなら連絡すればいいだろうが。帰ってくる時間が分かれば、俺も出る時間を調整できたんだ」

もつともなことだが、彰伸の電話番号もメールアドレスも聞いていない。

「連絡先知つてたら、ちゃんと言つたわよ」

「何だ、温子さんから聞いてないのか？ 俺の連絡先を郁美に教えておいて欲しいって頼んでおいたんだが」

冷蔵庫に食材をしまつていた彰伸が、わずかに眉間に皺を寄せて振り返る。

「はあ？ 温子さん？ 誰そ——」

言いかけた郁美は、はっと気がつく。

「ちよつと、人の親の名前、気軽に呼んでんじゃないわよ。……つて、あ！」

そういえば、昼休みに電話をしたあと、母親からメールがきていた。強引に電話を切つたから、言い足りなかつた分をメールで寄越したのだろうと思ひ、まだ見ていなかったのだ。

急いで手にしていたバッグからスマートフォンを取り出し、メールを確認すれば、彰伸のメールアドレスと電話番号が書かれていた。もちろん郁美の思つたとおりの母親ゆえの気遣いも書いてあつたが。

「……メール、昼過ぎにきてました」

がつくりと、郁美は床に膝をついた。

「確認してなかつたのか。お前、いろいろかつすぎだろ。それでよく営業やつてられるな」

その小バカにする言い方に、またカチンとくる。

「だつてお母さんからのメールよ？ 仕事に関係ないじゃない。それにあなたの連絡先が書いてあるなんて想定外すぎるわ」

「そこに座り込むな。邪魔だ」

上着を脱ぎシャツの袖をまくつた彰伸が、当たり前のようにキッチンに立つ。まるで自分の家のようなその振る舞いが、また郁美を苛立たせた。

「邪魔つて何よ。だいたい元はといえば全部あなたのせいじゃないの。勝手に押しかけてきて、うちに住むとか言つちやつて。そもそもうちの住所、どうして知つたのよ。お母さんが教えたんだと思つて電話しちやつたじゃない。そしたらお母さん、あなたとメル友だつて言うし。何やつてんのよ、私の知らないところで勝手に——わつぷ！」

「少し黙らないか」

口に押し込まれたのはおにぎりだつた。いつの間にか彰伸は、朝の残りのご飯を手早く一口大に握つていたらしい。

「腹が減つてるからイライラするんだ。すぐに飯作つてやるから、それまでおにぎりでも食つて繫いどけ」

「……うん」

確かに一理ある。郁美はももごと呷すすしながら素直に頷いた。

「俺が、この住所知ってたのが気になるのか？」

「気になるわよ。こっちは今あんたが何やってるかなんて、知らなかったわけだしさすがに、存在自体忘れていたとは口にできない。」

「薄情だな、お前。こっちはずっとお前のことを気にしてたのに」

「よく言うわ。十六年も音沙汰なしだったでしょうが」

郁美も偉そうなことは言えないが、彰伸だって引越してから何の連絡もしてこなかったではないか。気にしていたというのも、どこまで本当なのか怪しいものだ。

「お前がどう思っているようが、連絡しなかったのは事実だからな。まあ、正直に言うんだな、お前の住所は五年前に届いたハガキで知った」

「五年前？ 大学卒業して就職したぐらいか……って、まさか」

思い当たるものが一つ。彰伸の母親からもらった就職祝いのお礼に出したハガキだ。彰伸の家に連絡したのは、あとにも先にもその一回だけだった。

「あんたは、私がおばさんに宛てたハガキを見て、この住所を知ったってことね」

「そういうことだ」

たいてい自分の連絡先は実家にしていただけだが、このときはマンションの住所で送っていたことを思い出した。もしかすると無意識に、独り暮らしするほど成長したのだと言いたかったのかもしれない。

つまり犯人は自分だったというわけだ。疑ってごめんさい、と内心で母に詫びておく。

何となくばつが悪く、誤魔化ごまかすように郁美は彰伸の背後から声をかけた。

「ね、ねえ！ 何作ってるの？」

「後ろに立つな。気が散る」

向こうに行つてると言われ、郁美はおとなしくテーブルについた。調理する彰伸が気になって、寝室に引つ込む気にはなれなかったのだ。

彰伸が立つキッチンからは、トントんと軽やかな包丁の音が聞こえてくる。

「あんた、本当に料理できるんだ」

「何だ、朝食べたくせに信じられなかったのか？」

「そういうわけじゃないけど」

テーブルからでは背中しか見えないが、手際てぎのよさはよく分かる。本当に慣れたもので、包丁づかいもまったく危ないけど。

「仕事で必要だったから調理師の免許も取った。それに自炊していたから、たいていのものなら作れる」

喋りながらも彰伸の手は止まらない。フライパンを出し、刻んだ玉ねぎと細かく切った鶏肉を炒めたあと、炊飯器にあったご飯を入れてケチャップで味つけをした。それをまた炊飯器に戻し、使ったフライパンを洗う。

何を作っているのだろう。郁美はじっと彰伸を見守る。

さらに彰伸は冷蔵庫から取り出した卵を割って攪拌し、バターを投入したフライパンに流し込んでいる。そうしてでき上がったのは、オムライス。郁美の好物だった。

「できたぞ」

彰伸がチキンライスの上に乗ったオムレツを目の前で切ると、ふわふわの半熟卵が皿一面に広がる。いつの間にかサラダも用意されていた。

「すごい……」

「お前、親父が作るオムライスが好きだったからな。本当は炊き込んで作ったチキンライスを使いたいところだが、今日はこれで我慢しろ」

「覚えてたんだ、私がこれ好きだったの」

彰伸が自分の好物を覚えていて、作ってくれたことに少し胸がきゅんとした。

さっそく口に入れれば、バターの香りが口いっぱいに広がり、昔彰伸の父に食べさせてもらった味が甦ってくる。

「美味しい」

彰伸の料理の腕は父親譲りのようだ。いや、むしろ彰伸のほうが上か？

「お前、本当にうまそうに食べるな。作り甲斐がある」

「だって美味しいものは美味しいよ。ああ、幸せだー」

正直な感想が、郁美の口から出る。人は美味しいものを食べているとき、幸せを感じるということを、今まさに体感していた。もし彰伸が家にいてくれたら、こういう料理が毎日食べられるの

か――

そう思いつていることに気づいて郁美は焦る。まずい。いつの間にか食べ物で懐柔されている。「よかったよ、お前の口に合って」

焦りを胸の奥に押し込んでいた郁美は、目を細めた彰伸の顔が少し赤くなっているのに気づいた。もしかして、料理を褒められて照れている？

偉そうな態度で囁めつ面ばかりの彰伸が垣間見せた表情が、郁美をどきりとさせる。

再会以来、初めて見た気がする嬉しそうなこの顔をもっと見てみたいと思うし、正直こんな美味しい料理は毎日食べたいと思う。しかし、同居の話は別だ。

「あ、あのね、彰伸。考えたんだけど――」

予想外の心情の変化に戸惑ってなどいられないと、郁美は目下の問題を口にする。

「やっぱり嫁の話はなしでお願い。一緒にここに住むっていうのもね」

「ほお、それを食べながら言うか。美味しいと言って、食べるだけ食べて、か？」

朝と同じように郁美の正面に座った彰伸が、ひくりと眉を動かし、冷やかな目をこちらに向けたい。気のせいだろうか、周囲の温度が下がったように感じる。

「朝も言ったが、男とか女とかなら気にするな。お前の嫌がることはしない」

「嫌がることって、あんたね」

嫌がることはしないって、一緒に住むという話自体がもう「嫌がること」だということに気づけ。だがここで感情のままに声を荒らげてはいけない。冷静に話をしなければ。「嫁ならいい」と言っ

てしまったように、また余計な発言で墓穴を掘ってはいけない。

へびに睨まれたカエルの気分を味わいながらも、郁美は続ける。

「でもね、やっぱり、二部屋あるといつてもさ、一部屋は服を詰め込んで潰してるし、二人で住むには手狭だと思ふのよ。だから……」

「却下」

「え？」

「却下、と言ったんだ。こつちにも都合がある。それに何度も言うが、嫁なら同居してもいいと言ったのはお前のほうだ。それが一緒に住む条件なら、俺は嫁と呼ばれてもいいし、家事をするのにも抵抗はない。むしろお前に家事は期待していない」

彰伸の最後のひと言に、郁美はカチンときた。

家事が苦手なのは重々自覚するところだ。片づけは最たるものだが、料理とて似たようなもの。

だからといって面と向かって言われるのは、腹立たしい。一応、洗濯は人並みにできる。それを主張してみるかと思つたが、止めた。洗濯機に放り込むだけではないかと切り返されればそれまでだ。

そうはいっても、このまま言われつ放しでは気持ち収まらない。

「あんた、ちよつと失礼すぎない？ そりゃ昨日、嫁ならいいと言つたけど、あれは言葉のあやでしょうが。酔っぱらつてもいたし、本気じゃないの！」

「今さら本気じゃなかったと言われてもな。今日店に、連絡先としてここの住所を申請してきました」
「連絡先をここに？ 何考えてんのよ、まったく！ 冗談も通じないの？」

いや、ここで突っ込んで、また不毛な言い争いになる予感がする。話を進めなくては。

「……どうあつてもここに住むっていう気？」

「そうだ。ここ以上に、店に通うのに最適な場所はない」

「だったらこの辺で部屋を探せばいいでしょう？ いくらでもあるつて。何もうちに住むことないじゃない」

「もう決めた。それに、お前を独りで生活させられない」

独りで生活させられないつて、何様だ。あんたは私の保護者か！？

口をばくばくさせつつも、郁美は必死に次の言葉を探す。

どう言えばいい？ この厚かましい幼馴染みを言い負かすには。

だがこれといって妙案は浮かんでこない。それが悔しかった。子供のころ、何かにつけて負けたくないと思つていた彰伸に、苦手な家事とはいえ、今また負けを認めなければならぬことが。もつと母の手伝いをしてあげばよかったなどと、今さらどうにもならないことさえ考えてしまう。

「仕方がないな」

はあつと彰伸が盛大に溜め息をついた。

「そんな悔しそうな顔をするな。だったらこうしよう。この辺で部屋を探すから、それまででいい」
「部屋を探す？」

「ああ。仕事の合間に不動産屋を回るとしよう。だから、部屋が決まるまではここにいさせろ。そ

の代わり、その間はちゃんとお前の嫁をやってやるから」
「……分かった」

彰伸の言い分に納得したわけでは決してない。けれど、昔から口では勝てない男に対してどれだけ自分の意見を通すことができるのかを考えると——結局ここが落としどころなのかもしれない。彰伸が住むところに困っているのは昨日の話から分かっていたし、一応幼馴染みのよしみもある。ここは開き直って、期間限定の嫁に染をさせてもらおうと、郁美は思い直したのだった。

2

城之内彰伸。

今、自分に最大の心理的負荷をかけている張本人だ。

定時間近、柴山に頼まれて、次の営業会議に使うという資料のコピーを取りながら、郁美は胸にもやもやしたものが溜まっているのを感じていた。

小気味よい音を上げながらプリントし続けるコピー機を見つめる。こうやって紙を吐き出すように、胸の内に溜まったものをスイッチ一つで外に出せたらどんなにいいだろう。そうして出てきたものをシュレッダーにかけたい。細かく裁断してあとはゴミ箱にポイ。びりびりと引きちぎればストレス発散になるかもしれないし、ともかくすべてを捨ててなかったことにしてしまいたかった。

短気は損気とはよく言ったもので、何だか都合よく乗せられた気もしている。

彰伸が転がり込んでくるからすでに五日。彼はまだ居座っている。

確かに、彰伸が置かれている状況には、ほんのわずかだが同情するところもある。自分だって鬼ではない。困っている人を見れば手を差し伸べたいという気持ちは持っている。しかしそれはあくまでも、自分のキャパシティの範疇^{はんちゆう}でだ。それ以上のことを求められても困る。

今にして思えば、あれは交渉テクニクの一つではないだろうか。はじめに無理難題を突きつけ追いつめておき、ふっと譲歩を見せる。最初の要求のハードルが高かった分、それならまだマシだと思わせて受け入れさせてしまうという、あれだ。

やられた。

落ち着いて状況を把握したとき、まず郁美が思ったのがそれだった。

しかし実のところ、提示された条件はすこぶる魅力的で、心がまったく動かされなかったというわけでもない。

何ととっても、嫁。——家庭内労働全般を引き受けるというのだから。生きていくために必要な食住のうち、食と住が充実するのだ。いや、洗濯も入れば衣も含まれそうだ。

「男のくせに何ていうヤツだ」

郁美の口からつい言葉が出た。自分にもあれだけの腕前があれば、少なくとも嫁家業の請け負いに目がくらむなどという状況にはならなかったはず。

彰伸の家事能力はかなりのものだ。同居一日目にして——いや、再会した次の日の朝、部屋を見